

JHFREPORT



ブラジル、キシヤダから世界記録への飛行をスタート。撮影：平木啓子

平木啓子さん、礒本容子さんが航空スポーツ賞を受賞

7月は海の日が、8月は山の日があり、9月20日は空の日（残念ながら祝日ではありません）。

日本航空協会（JAA）の恒例行事である「空の日」航空関係者表彰式が、9月20日（火）、東京都港区新橋の航空会館において行われました。

航空亀齡賞は8名、航空功績賞は4名、空の夢賞は1名（レッドブル・エアレースの室屋義秀さん）、航空スポーツ賞は3名に授与されました。

航空スポーツ賞を受賞した3名は、国際航空連盟（FAI）世界記録を樹立した方々。模型航空機（フリーフライト室内機F1D級）滞空時間20分35秒の壇上彰宏さん、パラグライダー女性クラス目的地直線距離301kmの平木啓子さん、そしてハンググライダー女性クラス目的地直線距離367.6kmの礒本容子さん。

平木さんの記録は、2015年11月2日、ブラジルのキシヤダから353km飛行し

たときのもので、飛行前に宣言した目的地までの301kmが世界記録としてFAIに公認されました。

礒本さんは、今年1月7日、オーストラリアでの大会で超ビッグタスクを飛び切ってゴール。このフライトがFAIによって公認されたものです。

なお、平木さん、礒本さんのフライトは日本記録としてJAAに公認され、日本記録証も授与されました。あらためて、おめでとうございます。

JHFフライヤー宣言

1. 自分の意志と責任でフライトします。
2. 自己の健康管理を行い、健全なフライトをします。
3. 社会のルールを守り、第三者に迷惑をかけません。
4. 自然を大切にします。

スポーツクジ



JHFレポートはスポーツ振興くじ助成金を受けて発行しています

水難事故をゼロにする

JHF安全性委員会 委員長 伊尾木浩二

今年に入りパラグライダー・動力付きパラグライダー（以下、MPG）の重大水難事故が多発しています。昨年度も海岸や河川で死亡事故が発生しました。

海外の死亡事故例では聞くことが少ない水難事故。日本ではどうすれば、この事故を減らせるのでしょうか。

着水の危険性

海や河川、湖沼などに着水するとどうなるのか、自分の身に置き換えて考えてみてください。

山飛びパラグライダーの場合、通常の装備であるハーネスにプロテクターが装着されています。着水時には、このプロテクターが浮力体となり、ハーネスが浮き上がる傾向にあります。しかし、プロテクターの浮力によってパイロットの顔面は水に沈むことが多く、胸部にフロートまたはライフジャケットなどが無ければ、溺死する確率は高くなります。

フロートを取り付けていても、その浮力体の位置などを自分で調整し、呼吸確保できるようにする作業が必要になります。

また、着水と同時にパラグライダーのラインが足に絡みついたり、身動きが取れないまま、救助されるまでの時間を耐える必要もあります。

流れの無い湖沼であっても、着水すると浮力体が機能しない限り自己脱出は不可能に近いと言えます。まして、潮流や河川の水流にパラグライダーごと飲まれたとしたら、自力で流れから逃れられるものではありません。

レスキューパラシュートを開傘し着水した場合、風速4m/s以上ではキャノピーやパラシュートが空気をはらみ水面を風に引っ張られることも考えられます。パイロットは徐々に水面下へ引き込まれ、ライフジャケットを装着していなければ溺死することになります。「レスキューパラシュートを開傘したから安全」とは思わないように心がけ、リスクを十分に理解し、フライトに臨むことが大切です。

着水のパターン

着水事故に至るパターンには2種類

があると考えられます。

●操作不能状態での落下

操作不能状態は、たとえばSIV（飛行中のアクシデントのシミュレーション）によるアクティブ操作で回復ができない状態、スパイラルダイブからの回復操作ができなかった場合などが考えられます。レスキューパラシュートを開傘しての着水もあり、またはブラックアウトもあり得るでしょう。

湖上などでSIVを行う場合には浮力体を装着していますが、これも浮力体のタイプによっては、意識が無いときに呼吸を確保することが難しい場合があります。固形の浮力体の場合には浮力体に顎を乗せるといった動作が必要です。もし意識がなければ、この動作はできません。

●着陸時のグライドパスの読み間違いによるショート（手前に着陸）

グライドパスの判断ミスによるショートで着水。これがもし海岸であれば潮流により引き込まれる可能性があります。たとえば河原に着陸したもののキャノピーだけが川に浸かってしまった場合、インテーク内へ水が入れば、大きな負荷がかかり川へ引き込まれるしかなくなります。

また、急激に風が強くなるなどしてランディング場に戻れない、しかもそこは湖上……万が一そのような事態に陥りショートすることが確実になった場合には、ハーネスの全てのバックルを外して、対地（対水）5mくらいの高さで脱出する技もあります。しかし、

この技も決して安心はできません。身に着けている衣類に水が染み込むと、泳ぐことすら困難になります。一般的な水難事故で、溺れている人を救助しようとした人が溺れてしまう2次災害の原因の一つが、着衣のまま水に入ることなのです。

着水対策

着水を防ぐために、どのような対策が有効でしょうか。

●装備

装備の面では、明らかにライフジャケット装着が有効と言えます。現在、求めやすい価格のライフジャケットもあり、着水すれば膨らむタイプの膨張式モデルを装着すれば、フライト中に操縦への影響はさほど感じず、普通にフライトできます。海外で湖上アクロ、SIVをするパイロットたちは、ほぼ100%ライフジャケットを装着しています。

●フライト条件の判断

フライト条件の判断は離陸時だけでなく、飛行しながら、このあとどう変化するのか、しっかりと計算をすることが必須です。

危険性のある風に変わる恐れがある場合には、その日は飛ばないこと。ここで「不安はあるけれど飛んで着陸まで成功した」という結果が出れば、間違った判断で以後飛び続けることになり、間違った判断を常に維持することになります。

離陸前から着陸するまで安全な気象



膨張式ライフジャケットを装着。



パワーユニットにもフロートを装着。

条件を選ぶことが最も重要です。

●自身の技術レベルと判断レベル

あなたは自身の技術レベルと判断力を客観的に理解していますか。

安易に行ったアクティブ操作から回復できず落下したり、風の変化を細かく確実に判断できているのかどうか自信のないまま飛んでいるなら、あなたは初心者レベルです。「判断にはまあまあ自信があるけれどGPSを使いこなせない」という人は中級者以下のレベルと考えた方がよいでしょう。

中級者以下のレベルでは、機材の選択も慎重に行い、EN-Bミドルクラス以下で飛ぶことを推奨します。

大気の状態をしっかりと理解し、その学習知識があれば、機体コントロールに対する知識と技術のレベルは必ず上がっていきます。この機に自分自身が持つ力を見直していただきたいと思います。

ライフジャケット

前項でライフジャケットについて触れましたが、これを装着していれば絶対安全でしょうか。

まず、「絶対」という言葉はあり得ません。ライフジャケットもメンテナンスを必要とします。小さな穴があって空気が漏れたという話も聞いたことがあります。

ライフジャケットを装着したことだけで安心してはなりません。

海外の湖岸で飛ぶエリアでは、ハーネス内のプロテクターを外すこととライフジャケットを身に着けることをフリーフライトでも義務化しているところもあります。

MPGの水難事故防止

MPGでも同様に、水辺でのフライトにはライフジャケット装着が必須です。

また、燃料タンクがパワーユニットの下部に装備されているため、入っている燃料が少なければ、着水時にタンクが浮きやすくなり、パイロットの顔面は水面下に沈もうとします。

海外の湖上パイロンサーキットのトレーニングコースでは、練習中に着水する人が少なくありません。しかし、ライフジャケット装着、燃料は必ずタンクの半分以上入れるという対策をとっているため、溺死事故は起きていません。

日本では、パワーユニットに装着するフロートも販売されています。パイロットはライフジャケットを、ユニットにはフロートを、両方の装着が望ましいと思います。

現状では、ライフジャケットの装着は個人の判断に委ねられています。各エリアが自発的に「装着必須」のルールを掲げる日が少しでも早く来ることを願って止みません。

慣れないエリアでフライトする場合には、ライフジャケットを装着するこ

とで気持ちに余裕ができ、楽しくフライトすることができるでしょう。

ライフジャケットを見慣れない人は、装着に抵抗感があるかもしれませんが、日本では水難死亡事故が多く発生してきたことを考えてください。

事故をゼロに

ベテランパイロットが率先してライフジャケットやフロートを装着すれば、水難事故は減る。安全性委員会はそう考えています。

事故が減れば、一般の方々のスカイスポーツのイメージもよくなり、フライダー人口が増加する可能性が高くなります。

また、非常に残念なことに、パラグライダーの事故率が高くなり、パラグライディングスポーツの危険度は高いものと保険会社によって評価されつつあります。気軽に加入できる保険が無くなってしまうと、パイロットは大きなリスクを背負ってフライトすることを余儀なくされます。

今こそ、各人が安全意識を高めて、「安全かつ楽しく飛ぶ」ために何が必要かを考え、事故ゼロをめざして対策を実行していくときでしょう。

*安全性委員会が1999年に行った着水実験を参考にしてください。JHFウェブサイト→安全性委員会のページ→安全対策の項→「JHSC着水実験報告」

より安全なフライトのために

■秋でも脱水症状に注意！

夏は汗が出るため体内の水分が失われるのがわかりやすく、積極的な水分補給を心掛けますが、実は、それ以外の時期も脱水症状のリスクは変わりません。

秋～冬も、フライトで風に吹かれてからからの体では脱水症状のリスクが増加します。水分不足による血栓から突然死につながることも考えられます。

水分の不足で判断力が低下することも心配です。30分に一度は口を湿らす程度でも水分を摂りましょう。フライト中もチューブを通して簡単に飲水できるウォーターバッグが市販されています。

寒い時期は特にトイレの問題を気にしてしまい、給水を避ける傾向にあるので、意識して水分補給をしましょう。

■MPGへの苦情

MPGの迷惑フライト、危険フライトへの苦情が多く出ていますので、最近のものを紹介します。

●自動車会社テスト場内（滋賀県）へMPGが上空から侵入。試験車両運行が停止になり業務に被害を与えたと、自動車会社から注意通告がありました。自動車テスト場や製造工場付近のフライトは控えてください。

●大分大学医学部の病院から大分警察署経由のクレームです。MPGが病院の敷地内をフライトし、4階の病室の近くまで飛んで来た。ドクターヘリも飛んで来るのに危ない。

●群馬県桐生側から赤城山方面にかけて、低空で民家の上をフライト。何度

も目撃されており、群馬県警から群馬県連盟に連絡あり。

●群馬県渋川市付近を、民家の上空を低高度で何度もフライトし、危険でうるさいと何度か群馬県連盟に連絡あり。

MPGフライトでは以前から騒音問題が多く、マナーを第一に考えたフライトを行うようお願いします。

■安全意識を高めるために

琵琶湖でのMPG事故が多く発生しています。そこでJHFでは、安全意識を高めるために、琵琶湖周辺MPGスクールおよびクラブの代表者、県連盟も加わり、琵琶湖周辺におけるフライトルールの協議会を開催します。この協議会の報告は後日行います。

写真で空の仲間を増やそう！

第4回JHFハンググライダー・パラグライダーフォトコンテスト 入選作品発表

ハンググライダーやパラグライダーの写真を多くの人に見てもらうことによってこのスポーツの普及につなげようと開催してきたJHFフォトコンテスト。4回目も「ハンググライダー、パラグライダーの楽しさ、美しさを表現した写真作品」というテーマの下、多くのご応募がありました。ありがとうございます。

今回も審査員にフォトグラファターの嘉納愛夏さん、山本直洋さんを迎え、安田英二郎JHF副会長も加わり厳正な審査を行った結果、北川隆司さん撮影の「最後のフライト」が最優秀賞に輝きました。

北川さんは前回も地上撮影部門パラグライダー賞を受賞しており、その受賞作を撮影したお気に入りの場所、王子が岳フライトエリアで撮った「最後のフライト」が今回の最優秀賞を獲得しました。

北川さんをはじめ入選された皆さま、おめでとうございます！
(最優秀賞作品は8-9ページに掲載)

最優秀賞

北川隆司「最後のフライト」

撮影場所：岡山県王子が岳フライトエリア

受賞者から●今回は、瀬戸内の海に太陽が沈んでいく中を、パラグライダーが飛んでいくシーンを撮影しました。この場所は、ほんと眺めがよくて気に入っています。美しい眺めの中を2体のパラグライダーがすーっと流れていくのを見てみると、何時かは飛んでみたいと思わせてくれます。

嘉納評●応募作品のプリントは高品質なもので、最優秀賞に相応しい写真をさらに美しく際立たせていました。瀬戸内の島々、茜色に染まった空、ツインで飛ぶ同じグリーンのパラグライダー。さざ波の立つ海面は上空に吹くさわやかな風を感じさせ、どこから飛んでどこまで行くのだろう？と物語を紡ぎます。見た人がその短い旅を想像できる、そんな作品です。

山本評●構図、画質、プリントのクオリティの高さは今回の応募作品の中でビカイチでした。日も落ちてきてこの日最後のフライトに出たフライヤーを、夕日に照らされた海をバックにシルエットで写し込み、ノスタルジックな味わいのある作品になっています。この作品は地上で撮ったものですが、撮影者よりも低い位置を飛んでいるフライヤーを撮ることで空撮感も出ています。

空撮部門 優秀賞

高瀬吉康「氷河に肉薄！」

撮影場所：スイス Eiger Glacer

受賞者から●ヨーロッパの景色に魅せられてトレーニングを兼ねて機会をつくって訪れています。受賞した写真はスイス・メンヒの麓（Eiger Glacer）からシルトホルン方面に向けてフライトしながら撮影しました。ユングフラウヨッホを源頭とするグッジ氷河を間

空撮部門 優秀賞 高瀬吉康「氷河に肉薄！」





近に観ながら、X-Alps気分で飛べたのは至福のひとつでした。

嘉納評●こりゃ、なんだかすごいところを飛んでいるな!というのが第一印象です。そして、空撮なので撮影者も同じくらいかそれ以上にすごいところを飛んでいるのでしょう。切り立った荒々しい崖に沿うように飛んでいるパラグライダーにドキッとします。険しい雪山は、人間はちっぽけな存在で、自然は厳しく一筋縄でいかないことを語りかけているようです。そして、人間として自然に逆らわず同調し、生かしてチャレンジする、そんな素晴らしさを感じました。

山本評●この作品はとにかくロケーション勝ちです。こんな絶景の中を飛んでいるというだけで羨ましくなります。これがもっと広角で撮られたものだったとしたらここまでの迫力は感じなかったでしょう。氷河の荒々しい部分を切り取り、パラグライダーを崖で影になっている場所に入れたことで、氷河だけでなくパラグライダーの存在感もあります。大きくプリントして飾りたい作品です。

地上撮影部門 パラグライダー賞 高瀬吉康「Happy Wedding!」

撮影場所:スイスグリンデルワルト(フィルスト)
受賞者から●スイスで1、2を争う有名なエリア、グリンデルワルト(フィルスト)。ゴンドラから下りてテイクオフに向かう途中、羨ましい光景に遭遇。思わずシャッターを切りました。素晴らしい景色のなかでの記念撮影。この日はハッピーな気分で、心のシャッター大公開で綺麗な景色を眺めながらたくさん飛ぶことができました。

嘉納評●とても面白いと思いました。ただ、山の雪にパラグライダーが溶けてしまい、もったいない!の一言です。意外性は一番でした。これまで見たことのないシチュエーションで、見ていただけでのんびりした気分になります。この作品からは澄んだ空気と草の匂いさえ感じました。疑問は、狙って撮ったのか、結婚式を撮っていたらたまたまパラグライダーが現れたのか? 気になるところです。

山本評●こちらもロケーションが素晴らしいですね。手前にウェディングフォ

トを撮っているカップルやくつろいでいる牛を入れることで谷の奥行き感が際立っています。とても面白い写真なのですが、パラグライダーの存在感が薄くなってしまっているのが残念です。地上撮影なのでもう少しパラグライダーが近づいてから撮るとか、可能であればちょっと移動してパラグライダーの位置を変えて撮影できればさらに良い作品になったかもしれません。

地上撮影部門 ハンググライダー賞 佐藤博子「テイクオフ!」

撮影場所:静岡県富士宮市猪之頭朝霧高原

受賞者から●1月に開催されたハンググライダー大会・西富士ジャパクラシックでのテイクオフシーンです。緊迫感、スピード感、そしてハンググライダーの魅力が伝えられればと思いました。

嘉納評●ハンググライダー作品の応募が極端に少なく、すわ、受賞作なしか?!という危機を救ってくれたのがこの作品です。スピード感、気迫、構図、流し撮りの技術に優れていると思います。ただ、同じアングルから撮影した決し

て少なくない複数枚をご応募いただいたのですが、見飽きてしまう危険性を伴うので、応募作は「自信のあるコレ!」というものに絞るほうが賢明でしょう。

山本評●ハンググライダーテイクオフの瞬間をうまく流し撮りで切り取っています。他にも何枚か同じ位置から撮られたものがありましたが、この写真が一番フライヤーの表情を捉えていました。大会での一コマということで、その表情から勝負に向かう選手の緊張感が伝わってきます。今度はぜひ飛んでいるフライヤーの流し撮りに挑戦してみてください。

審査員総評

嘉納愛夏



全体的にバランスの取れた作品が集まったと思います。撮影場所、アングル、季節感などでバラエティもありました。空撮部門の応募数が減っているのが気になりますが、地上撮影部門の作品のクオリティが上がったように感じます。空を飛んでいない分、工夫と意気込みが見られる、ということかもしれません。

地上／入選のバルーン遊具?とパラグライダーを写した作品や、地上／パラグライダー賞の牧場ウェディングの背景にパラグライダーが飛んでいる作品など、意外性のあるものは新鮮で見ていて面白いです。

“きれいな海とパラグライダー”などは定番で、どうしても見慣れた写真になりがち。構図や撮影時間、被写体と背景の色のバランス（主役が際立っているか）を気にするだけで、ちょっと違った写真になるはずです。

あとひとつ、ハンググライダー賞は狙い目ですよ! なので次回はハングも狙ってみてください。

(フォトグラファー)

山本直洋



JHFハンググライダー・パラグライダーフォトコンテストも4回目を迎え、4回とも審査員をさせていただき様々な作品を見てきました。毎回応募される方もおり、撮り方も工夫されている作品もあります。ただ、カメラは高性能が進みさらに小型化され誰でも低価格で購入できるようになり、今まで

地上撮影部門 ハンググライダー賞 佐藤博子「テイクオフ!」



なかったようなツールもたくさん出てきている割にはフォトコンテストに応募されてくる作品のバラエティはそれほど増えていないように感じます。

全体的に写真としてのクオリティは上がってきていますが、アイデア勝負の作品が少なくなってきたのは少し残念です。今やスマートフォンでもかなりきれいな写真が撮れてしまう時代です。どんどん新しいツールを使って、今まで見たことのないような撮影にチャレンジしてみしてほしいと思います。

(Aerial Photographer)

安田英二郎

今年は応募された作品数が少なめでしたが、フォトコンテストを重ねるに

従って美しい写真が増え、写真としての質も高くなってきた印象です。地上撮影部門はいいカメラを使えば美しい写真は撮れるので、表現したいものを明確に意識して撮影されたいと思います。空撮部門は撮影機材の性能向上による画質の向上が著しいので、今後は空から撮りましたというにとどまらず写真としての完成度をさらに高める必要があるでしょう。

今回は怪獣写真が入選しましたが、こういう楽しい写真も歓迎します。また、ハンググライダーの写真がとて少ないので（入選確率が高いのでお得です…）積極的な応募をお願いします。



(JHF副会長)



小川由希子「鯉のぼりフライト」
撮影場所：石川県獅子吼高原スカイレジャーエリア



前島聡夫「永遠に続く道」
撮影場所：愛知県高塚エリア



加藤文博「ときめいて 空に一步」
撮影場所：兵庫県青垣町岩屋山



今里雅治「テイクオフでブロッケン」
撮影場所：静岡県伊豆スカイライン



高良繁次「水納島」
撮影場所：沖縄県水納島

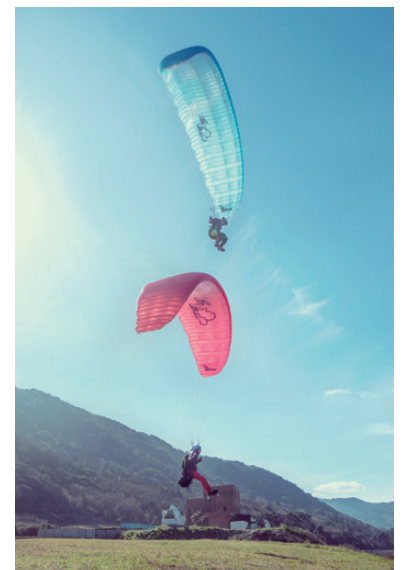


三澤洋子「Rising Sun」
撮影場所：沖縄県南城市知念岬

地上撮影部門入選



北川隆司「美味しそ〜!!」
撮影場所：岡山県瀬戸内市



前島聡夫「戯れ」
撮影場所：愛知県空ともパーク





第4回JHFハングライダー・パラグライダーフォトコンテスト 最優秀賞「最後のフライト」 撮影：北川隆司

■パラグライダー体験会開催報告

東京都ハング・パラグライディング連盟

昨年8月に続いて、今年も8月6日(土)と8月7日(日)の2日間に渡り、東京・有明にある東京臨海広域防災公園(そなエリア)において、東日本大震災復興支援熱気球イベント「空を見上げて」が開催され、これに併せて、日本航空協会(JAA)の主催により、航空スポーツ教室が開催されました。

今回は、パラグライダー浮上体験、模型飛行機教室、マイクロライト航空機、そしてセールプレーン実機の展示が行われました。

パラグライダー浮上体験はJAAからの依頼により、東京都ハング・パラ

グライディング連盟が担当しました。

両日とも天候に恵まれ猛暑日となりましたが、2機のパラグライダーを使い、人力による浮遊体験を実施。50名を想定して準備していた中、これを越える希望者が集まり、急きょ態勢を整えて、1日目は約70名の子どもたちが体験しました。2日目は評判を聞いて始発電車で駆けつける方も出て、大盛況のうちに事故なく終えることができました。

体験の実施には日本学生フライヤー連盟を中心に2日間延べ約40名の協力を得、レベルの高いサポート技術と旺盛なサービス精神のおかげで子どもたちは大喜び、全員満面の笑顔で帰って

ゆきました。次はタンデム体験したい!と宣言される子どもや親御さんもいらっしゃいました。

この場を借りて協力してくれた全員に感謝いたします。

東京都区部で開催される同イベントは、今後も定期的に開催される計画とのこと。このスポーツの普及振興の一環を担ってゆくことになりそうです。

また、公園関係者の注目も得ていたようで、年内には念願だったハンググライダーの体験会を同エリアで開催できる見通しが立ちました。継続して実績を積み重ねてゆくことの大切さを実感しています。今後も各位のご協力をお願いする次第です。



炎天下を走り続けた甲斐ありたくさんの笑顔をもらった。



スタッフとして参加したJAAの田中さんも浮上体験。



湾岸エリアを一望できる熱気球の体験は大人気。

JHFの動き

HG&PGの魅力を発信

今秋は三つのイベントを後援

一人でも多くの方にスカイスポーツの魅力に触れてもらおうと、この秋JHFは下記のイベントを後援します。

●10月15日(土)、千葉県立幕張海浜公園で開催された親子スポーツフェスティバルで、ハンググライダー体験を実施しました。

<http://www.seibu-la.co.jp/makuhari/event/20160915174537.html>

●10月23日(日)、埼玉スカイスポーツフェスタ2016。毎年恒例になってきたスカイスポーツのイベントで、JHFはパラ、ハングのデモフライトと体験会をします。

<http://www.skysportsfesta.com/>

●11月6日(日)、東京臨海広域防災公園(そなエリア)のちびっこパークイベントで、ハンググライダー体験を実施します。

<http://www.tokyorinkai-koen.jp/news/event/>

熊本県フライヤー連盟に

義援金を託しました

被災地復興応援プロジェクト「空はひとつ」に寄せられた熊本地震被災地向けの義援金45,000円を、熊本県フライヤー連盟に託しました。同連盟ではその使途を理事会で検討、大観峰のフライト案内看板設置を内定しました。以下は同連盟理事長、矢次真実さんからのメッセージです。

「大観峰は熊本の代表的なフライトエリアとして、全国から訪れるフライヤーが雄大な景色の下でフライトを楽しむことができる場所です。スクールやクラブで管理しているのではなく、大観峰茶屋さんのご厚意により無料で自由にフライトができます。パラグライダーの飛行は大観峰の名物になっており、多くの観光客に見て楽しんでもらっています。ただし、フライヤーの駐車場の使用方法など、問題がまったくないわけではありません。

今回の熊本地震では、大観峰茶屋さ

んの建物その他の被害、崖崩れなど周辺の土地被害は甚大なものでした。

そのような状況で早期にフライトを再開できたのは、大観峰茶屋さんを始めとする地元の方々の理解があったからに他ならないと考えています。

そこで、今後も大観峰でのフライトを安全かつ友好的に存続させ、いつまでも全国(および全世界)のフライヤーが気軽に訪れて楽しめる場所とするために、フライヤーの皆さんにエリアについての案内をする看板の設置に義援金を活用させていただけないかと考えた次第です。全国から応援をいただき、ありがとうございました。」

2017年JHFカレンダー

頒布のお知らせ

2017年JHFカレンダー(吊り下げタイプ)を1冊500円で頒布します。JHF登録スクールかJHF事務局でご購入いただけます。準備できましたらウェブでご案内します。

吸い込まれるようにパッドを踏んでいた。

パラグライディングアキュラシー女子アジア選手権者 伊藤まり子

世界では選手権獲得や記録樹立、国内では競技クラス総合トップに立つなど、ここ数年、日本の女性パイロットの活躍が著しい。

伊藤まり子さんは、今年5月・6月にカザフスタンで開催された「第3回FAIパラグライディングアキュラシーアジア選手権」で女子クラス優勝、アジア女王の座を日本に奪回。海外大会経験4回目にして表彰台の真ん中に立った伊藤さんに聞いた。

◎アジア選手権にはどのような気持ちで臨んだのでしょうか。

「昨年の世界選手権で女子2位につけていたのにペナルティでメダルを逃したので、今回はなんとしてもメダルを持って帰る！やらなきゃ！と意気込んでいました。他の国の選手に顔見知りの人が増えたおかげか、楽な気分で競技に臨めて、変に力が入り過ぎるということはありませんでした。」

◎競技初日に首位、そのまま独走して勝ちましたね。

「守られている、としか思えません。他の選手が飛ぶときには乱れていた風が自分が飛ぶときだけ安定しているように感じて、最初から最後まで運がついていて吸い込まれるような感じで、パッドがいつもよりはっきり見

えました。空中で冷静でいられたし、なんだか不思議な初めての感覚でした。日本チームのメンバーが声を掛け合って、いい雰囲気の中で競技できたのも勝ちに繋がったと思います。」

◎神が降りてきたかのような感覚は帰国したら消えてしまったと笑う伊藤さん、チャンピオンになった感想は？

「表彰台で君が代を聞いたときは感動しましたが、神懸かりで勝てたのであって、実力で一番になった感じがしないんです。金メダルに恥ずかしくない飛びができるようにもっと練習しないといけないと思っています。」

◎スキューバダイビング仲間に誘われて体験したパラグライディングにのめり込んで、2012年に初めてアキュラシーリーグ大会に参加したそうですね。

「私はソアリングして長く飛ぶことも好きですが、テイクオフやランディングの感覚が好きなんです。だからサーマルタイムが終わっても何本も飛ぶ。普段お世話になっている今井浜エリアでは10本以上飛んだこともあります。同じエリアの横井清順さんがアキュラシーをやっているのもおもしろいので、試しに大会に出てみたら、アキュラシーの選手が楽しい人たちで！みんなに会うために大会に参加するようになり、2013年、ボスニアヘルツェゴ



多くの応援と運を味方にした伊藤さん（中央）。

ビナの世界選手権に運よく出るようになりました。あれから本格的にアキュラシーにはまったという感じですね。」

◎着陸精度を競うアキュラシーは簡単なようでいて奥が深いと言われます。どんなところにアキュラシーのおもしろさがありますか。

「上達したのが数字でわかるところ。気象条件や機体性能が大きく影響するパイロンレースと違って、アキュラシーは自分の力がはっきり見えます。そこにおもしろさを感じます。『自分がグライダーをコントロールしている』という感覚も好きですし、他の選手の着地スタイルの違いを見るのも楽しい。追いつける身としては、順位が大逆転することがあるのもおもしろいですね。これからも飛べる限り飛んで、真ん中を狙う楽しさを追い続けていきたいと思っています。」

航空スポーツ賞：平木啓子さん・磯本容子さんからひとこと

大活躍する女性パイロットの先頭を走る2人、平木啓子さんと磯本容子さんが、1ページでお知らせしたとおり日本航空協会の航空スポーツ賞を受賞しました。力強い受賞コメントをどうぞ。

●平木啓子

記録を狙ってブラジルに通い続けて3年目の昨年11月、ようやく世界記録を樹立することができました。

残念ながらその記録はわずか1ヶ月足らずで破られましたが、自分の軌跡がFAIに残り、航空スポーツ賞という栄誉ある賞をいただいたことを誇りに思います。

この受賞は、いつも応援してくだ

さっている多くの方々のおかげです。大変感謝しております。今後も更なる記録更新を目指し頑張っていきたいと思います。

●磯本容子

オーストラリア、フォーブスの大会にて367.6kmタスクでのゴールをきめ、これが世界記録と日本記録となり、航空スポーツ賞を受賞しました。女子世界選手権優勝に続き2年ぶり、2度目の受賞です。この度、日本航空界の発展に寄与された代表的な方々と共に受賞できたことを嬉しく思い、また、今回の記録提出に際しご協力くださった方々に感謝いたします。

今後、ハンググライダーを愛するパ



FAI世界記録証を手にする平木さん（左）と磯本さん。

イロットとして、私自身の人生に豊かさを与えてくれたこのスポーツを、自らのライフスタイルを通して表現し、少しでも多くの方にその良さを感じてもらえるようなパイロットでありたいと思います。ありがとうございました。

日本チーム、メダル獲得の目標を達成！

7月16日～30日 マケドニア共和国Krushevo 報告：チームリーダー 太田 昇吾

7回目のクラス5世界選手権が7月16日から30日までマケドニア共和国Krushevoにて開催されました。クラス1ヨーロッパ選手権と同時開催となり、合計約130人の選手が集まる大きな大会となりました。

世界選手権は、各国代表3名のチームからなる国別総合及び各国代表の個人総合で争われ、国別総合はタスク毎に代表3人中の上位2名の得点を計上しその合計点、個人総合は成立タスク全ての合計点、の結果となります。

本大会の日本チームとしての目標は国別3位以上（メダル獲得）、個人の目標としては、優勝候補の板垣選手は優勝、山本・太田選手はトップ10を目標、個人総合に参加の松田選手は事故無く無事に飛び切ること。

世界選手権をはじめ海外での競技フライトでは大会前準備に非常に手間がかかります。空港に到着、レンタカーを借りる、機体運搬用キャリアを作る、機体をピックアップしてセットアップ、今回はドイツミュンヘンからA-I-Rの工場（有名なノイシュバンシュタイン城の近くにありますが）を経由してマケドニアまでの陸路約1600km、6ヶ国を24時間かけて移動、それだけで出発から数日間が必要となります。

大会中も、道路状況が日本ほど良くないマケドニアではタイヤのバースト、衛生面でも基本的には問題無いが食中毒や食あたり等もあり、色々なトラブルを克服して戦ってきました。

今回大会本部がKrushevoの町外れの大きなホテルで、日本チームを含むほとんどのチームがそこに滞在。受付やフライト後のGPSダウンロード等がスムーズに行われ、テイクオフまでも車で5分程度と大会中の無駄な移動が無く、非常にストレス無く過ごすことができる良い環境でした。

11日のコンテスト期間中、初日から6日連続でタスク成立、レストデイと雷雨キャンセルの2日間をはさみ、最終日まで3日間連続でタスク成立、合計9本のタスクが成立する好条件の下、思う存分飛ぶことができました。

Task1●84.9km

あまりにも渋いコンディションでゴールした6人以外は全員スタートできずリフライトになり、しかも大会側からリフライト終了時間の情報が発信されず、ヨーロッパ選手権に参戦していた大沼選手からリフライト終了時間の情報が入った段階で残り1時間を切っていて、しかも1人回収できていない状況。チームとして、1人を残して選手3人でテイクオフに上がり、2人はサポート、板垣のみをリフライトさせることを決断。板垣はリフライト終了10分前にテイクオフ、最後の最後まで粘ってゴールまでは届かなかったもののゴールした6人の次のデイリー7位に入ることができました。

Task2●115km

北風が強く、最初の高い北の山パイロン付近で降りてしまう選手が数名出たが、25人の大量ゴールとなり、日本チームも板垣4位、山本11位と健闘。

Task3●143.4km

スタートは前日同様、北の山パイロンから平地を南下して西の湖、北上してプリレプ北の岩山を取って平地の真ん中の飛行場ゴール。

13人ゴール、日本チームは板垣2位、山本6位、太田11位と善戦。ここでフランスチームを抜いて日本チームが総合3位になりました。

Task4●127.6km

今日も、平地を何度かクロスして最後はテイクオフ下のメインランディング場ゴール。最後のコースはヨーロッパ選手権のタスクとほぼ一緒で、沢山の選手がゴールラインに向かってグラインドしてくる光景が綺麗でした。

19人ゴール、日本チームは板垣4位、太田8位、松田18位と今日も3人ゴール、しっかり国別3位をキープ。2位ドイツチームとも200点差。

Task5●149.9km

今日は、西側の山沿いを南下、北東の山まで平野を渡り、東側の山沿いを南下して、最後は北西に平野を渡り飛行場ゴール。後半は海拔3300mまで上がる好条件でしたが、北風がやや強くファイナルレグが厳しいタスクとなり

ました。

21人ゴール、日本チームは板垣3位、太田11位、山本19位。国別3位キープ。4位イタリアチームとの点差は早くも1400点。

Task6●193.3km

Krushevoエリア最長タスク。条件が良いと言うより、次の日がオフィシャルレストデイと決定していたので、チャレンジングタスク。

ゴールはわずか3人。板垣がわずか100mショートでゴールを逃すも4位、太田も170kmまで飛び9位に入り、日本チームは国別3位、4位スペインとの点差1800点。2位ドイツチームとは700点差。

翌日はオフィシャルレストデイ、その翌日はサンダーstormで2日間の休息が入り、残り3日間の後半戦に。

大気の状態がやや不安定で所により雷雨予想もあったが、絶妙なタスクセッティングで後半3日間も競技成立。

Task7●117.7km

テイクオフ沿いの山沿いを南下、北上して、東に平野を渡って再度南下、北上して飛行場へのゴール。条件が渋く、特に東に平野を渡ったプリレプ周辺が鬼門になりました。

15人ゴール、日本チームは太田が唯一ゴール10位。それでも国別3位はキープ、4位イギリスチームとは1600点差。

Task8●126.9km

条件が渋く、高層雲が張り更に渋くなったタスク中盤、テイクオフ付近に戻るところが鬼門となりましたが、16人ゴール。

日本チームは板垣4位、山本7位と善戦しました。国別3位、4位イギリスチームと1700点差、2位ドイツチームと1500点差。残すは一日のみ。最終日に日本チームが飛びさえすれば逆転の可能性が無くなる点差になりました。

Task9●117.5km

最終日、大気の状態は不安定、山沿いは雷雨の可能性あり。不安定なのでリフトも豊富だがオーバーキャストして条件が変化しやすい。すでにショートタスクに感じられるぐらい沢山飛ん



130機が並ぶテイクオフは壮観。手前がクラス5。(写真提供：すべて山本剛)



日本チーム3位。メダル獲得の目標を達成。



右から松田、板垣、山本、太田、大沼各選手。

だエリアで、大量24人ゴール。

日本チームは山本6位、太田12位、松田24位。最終日個人総合順位に勝負をかけ残念ながら途中で降りてしまった板垣以外の3人がゴールを決めて国別順位3位を確定することができました。2位ドイツと1800点差、4位イギリスチームと1550点差。

大会中、他国選手が数名怪我をしていましたが、日本チームは選手はもちろん機体の損傷も無く世界選手権を戦うことができました。また、回収及びサポートとして同行していただいた水越さんには、準備段階から大会中は選手の回収はもちろん時間の無い選手への多大なサポートをしてもらいました。ありがとうございました。

今回、私としてはチームリーダー兼任代表選手として臨んだ初めての世界選手権で、どうなることかと思いましたが、ドイツ、オーストリア、イタリア、フランス、イギリス等の大きなチームとは違い、選手兼任のチームリーダーが日本チーム以外にも数ヶ国あり、とても励みになりました。

良いメンバーに恵まれ、目標のメダルを持って帰国できたことを本当にありがたく思っています。

最後に、JHF、HG競技委員会、HangAid2016、皆様の応援・協力のおかげで、クラス5日本チーム初のメダルを獲得することができました。この場をお借りして感謝とお礼を申し上げます。ありがとうございました。

成績

[個人総合]

- 1位 Tim Grabowski
ドイツ 7564点
- 2位 Christopher Friedl
オーストリア 6867点
- 3位 Wolfgang Kothgasser
オーストリア 6724点
- 6位 板垣 直樹 5784点
- 13位 太田 昇吾 4629点
- 15位 山本 剛 4584点
- 28位 松田 隆至 1929点

[国別総合]

- 1位 オーストリア 14186点
- 2位 ドイツ 14021点
- 3位 日本 12194点

「勝つためにはしっかりと準備し、明確な目標を設定する。」 板垣 直樹

今回のフライトエリアはなだらかな山と丘に囲まれた平地が多い盆地。対面の山並みまで30km程、ギリシャ国境まで45km程のクラス5世界選手権としては比較的狭い範囲だ。西160～170km、南130～140kmに海がありそれほど内陸のエリアではないため、サーマルタイムはあまり長くないが、ほぼ四方を山に囲まれているため海風の影響はない。ランディングする平地は低い所でも海拔600m以上あり周りの山並みは1000～2000m程で午前中は低めの逆転層ができることが多い。

プレ大会に参加していない我々日本選手にとって、地の利がなくてもまったく不利にならない教科書通りのフライトができる環境だ。風は強すぎず、サーマルは平均すると+3～6m/sで安定、今回は雲もよくできた。

今までクラス5世界選手権はクラス1女子とクラス2の世界選手権と併催

だったが、今回はクラス1ヨーロッパ選手権と同時開催となり、いつもクラス1と5両方の競技に出場しているヨーロッパの強豪選手のクラス5世界選手権への参加が少なかった。私は2000年から2013年まで連続出場して10位以内の入賞は数回経験している。この世界選手権に賭ける思いは強く、今回こそ世界チャンピオンになるっ！と意気込んで挑んだ。

競技の中で自分の良いところを活かした飛びをするのは簡単で、雲や地形、気象条件をよみ先頭を進むこと。前を飛ぶことで滑空比は良くなり雑念なく自分の信じる進路を進める、このパターンになれば強さを発揮できる。

しかし、スタートに失敗した後から追いかけるパターンは、辛抱、忍耐がなく無理に前に出て低くなり、一人でサーマルを探し更に低くなる。自分でもわかっているのに修正できないこと

がそもそもの弱さで反省点だ。

結果は国別順位が3位で目標の表彰台に上がることができたものの個人総合6位となった。個人としては悔しい結果だったが、チームメンバーに恵まれ国別では強豪オーストリア・ドイツに続く3位。銅メダルを胸にした表彰台はかけがえのない経験となった。

実は競技前日に食中毒になり、前半は持ち前の体力と気力で集中した競技も、中盤に差し掛かると体力がなくなり集中力も落ちた。これが順位を落とす結果につながったことは事実だが、自己管理の悪さが悔やまれる。

世界選手権に挑むにあたり重要なのは、しっかりと準備すること！そして明確な目標を設定すること。

世界選手権は原則2年毎の開催だ。次の大会に焦点を絞るなら競技は2年前から始まっている。

もう一度、頑張るのか、俺！？

今年も琵琶湖に暑い夏がやってきた！

第39回鳥人間コンテスト2016 報告：山本 貢

今回で39回目となった鳥人間大会が、去る7月30日と31日の2日間開催された。その模様をレポートしたい。

まずは滑空機部門。

今年初頭より、滑空機部門のパイロットとしての練習のため、足しげくハンググライダーの練習に通っていた東京理科大の倉上氏。B級を取得し、山飛びまでに至るほど練習した成果が出て、203mとまずまずの飛距離。彼の今後の活動に期待したい！

昨年、信じられないようなミスで優勝を逃した、みたかもばら下横田チーム。昨年のミスを教訓にし、今年はミスを絶対に犯さぬようにフライトをまとめ上げ、再び王座を奪還した。

個人的には、みたかもばら下横田の最大のライバルとなりえたであろうアクティブギャルズの参加がなかったことが惜しまれる。

続いてタイムトライアル部門。

この部門は500m先のパイロンを旋回し、再び戻ってくるまでのタイムを競う部門であり、パイロン旋回時の技術が要となる。

6機の参加のうち、その半分の3機が見事にパイロンを折り返してゴールまで戻ってくることができた。

この種目で今回優勝した名古屋大学

の機体は、実はとてもユニークなアイデアが使われていた。11m²という人力飛行機としては型破りといえる小さな翼面積に加え、外翼、内翼に独立した2段のエルロン、更に、フラップまで搭載されるという野心作だ。

今までのタイムトライアル部門では、そのタイムを縮めるために、機体に多く採用されていた技術は翼端全動型のエルロンであった。これは翼端が全体にエルロンとなって動き、旋回を今までよりスムーズに行えていたが、反面大きなアドバースヨーが出るという欠点もまだまだあった。

優勝した名古屋大学の機体は、翼の後縁に独立した二つのエルロンを持っており、これは上記のアドバースヨーをうまく抑え、スムーズな旋回が行える可能性を秘めたものである。加えてフラップまで装備されており、正直、フラップを下しての飛行は、よりパワーが必要とされるものの、旋回半径を小さくしてくれるというタイムトライアル部門としては有利な可能性もある。

今回の名古屋大学の飛行は、優勝はしたものの歴代記録ではまだ3位である。しかし、上記の機構はまだまだ進化する可能性も大きいため、今後このチームが歴代記録を更新する可能性も高いといえるであろう。

最後に人力機ディスタンス部門。

この部門では、最後は強豪といわれる日大理工と、その最大のライバルといえる東北大学ウインドノーツとの戦いとなったが、風の条件がより良かった日大理工が優勝。

一番最後のフライトとなり、残念ながら強風という大きくハンディーのある条件で飛ぶことになったウインドノーツ

は、向かい風でほとんど進まないという状況に陥り、日大の記録にわずかに及ばぬ結果となってしまった。しかし、実質的な飛距離というならば、今回はウインドノーツに軍配が上がるであろう。

今回は他にも注目すべきチームが現れた。BIRDMAN HOUSE 伊賀という社会人チームだ。

チームといっても主として動いているのは設計者兼パイロットの渡邊氏だけである。彼が作り上げた機体は、審査員らを驚嘆させた。各部品が非常にきれいに作られており、部品によっては表面処理まで施された完璧な出来栄であった。それもそのはず、彼は有名な某工作機器メーカーの社員だったのである。そのため、最先端の工作機器がふんだんに使えたため、今まで作ることができなかった完璧な人力飛行機を作ることができたのである。

彼はもともと東大の人力機チームに所属して鳥人間の活動をしていたが、社会人になって以降様々な理由で鳥人間大会に出場できずにいた。今回の機体は、そんな実力ある渡邊氏の力の集大成のものといって良いであろう。記録も、日大、東北大に次ぐ第3位であり、正直、更に鍛え上げられた筋肉を持つ者がパイロットを勤めれば、優勝することもそれほど難しいことではないと思える。

毎回の鳥人間大会に関わらせていただいているのであるが、とにかく皆さんスゴイ！！

生活のすべてを鳥人間に捧げ、ひたむきに活動しているその姿には、正直頭が下がる。鳥人間はテレビの番組に過ぎないが、それに没頭した若者の中から、既に宇宙飛行士が2名も輩出されている。

その他にも、世の中で第一線の技術者として活躍する者も多くいる。大げさでなく、私はこの鳥人間で頑張った若者たちが、将来、日本の産業界を支える人材に成長していくと思う。

つまり、琵琶湖に集まった若者たちは、みな「金のたまご」なのではないかと思う。そんな「金のたまご」がより多く育つように、この鳥人間大会も末永く続いてほしい。



東京理科大学の倉上氏。ハングの上達が早かった！



革新的な機構を持つ名古屋大学の機体。実にユニーク。



東京芝浦大学。このチームを題材とした映画が来年公開。

今回は二つの大会を報告します。

尾神岳Paraglider Student Cup 2016

今年の尾神岳PGSCは8月23日（火）から8月25日（木）の3日間で開催され、弘前大、秋田大、山形大、東北芸術工科大、日本大、明治大、山口大の7大学から計17名の選手が参加（Expertクラス5名、1stクラス6名、2ndクラス6名）。尾神岳PGSCはA級生から出場できるので、パラグライダーを始めたばかりの1年生もエントリーしてくれました。

Expertクラスはクロスカンントリー、1stクラスはデュレーション、2ndクラスは飛行距離を競うL/D競争。大会前は台風の影響が心配されましたが、2ndクラスは全日程で競技成立。1stクラスとExpertクラスは2日目と3日目は競技が成立しました。

大会1日目は北西の風で時折雨もばらつく天気でしたが2ndクラスの選手は天気を見ながら各選手3本ずつ飛行。1日目の最長飛行距離は169m。

この夜は恒例の交流会が行われ、豪華な焼肉を食べおいしいお酒を飲みながら、大学間を超えた深い交流ができました。

2日目は朝から晴れ気温も高く選手には体力的に厳しい条件。2ndクラスは、風向きが不安定で待ちの時間が多かったのですが、各選手3本ずつ飛ぶことができました。この日の最高飛行距離は177.6m。1stクラスは選手5人が15分以上飛び競技成立。14時頃から多くの選手が上げることができるようになり、最長飛行時間は1時間36分31



美しい風景を眼下に、厳しい暑さのなかでテイクオフ。



競技飛行や交流を通じて得るものが多かった選手たち。

秒にも達しました。Expertクラスは1人の選手だけがタスクを全て回ることができました。

最終日も朝から晴れ気温は3日間のうち最高に。2ndクラスは9時半から飛び始めて3本ずつ飛び、最長飛行距離は165.3m。1stクラスは13時頃から気象条件が良くなり選手はうまく上げることができていました。最長飛行時間は1時間49分46秒。Expertクラスは2人の選手がタスクを全て回ることができました。

GPSのトラブルで閉会式が遅れましたが、それ以外は大きなトラブルもなく、全選手が安全フライトを意識して競技を行ったこともあり、一人のけが人も出ることなく大会を終えることができました。

Expert class

- 1位 福丸 貴大（山口大学）
- 2位 仲田 未優（明治大学）
- 3位 松本 健吾（明治大学）

1st class

- 1位 石塚 亮太（明治大学）
- 2位 山本 岳史（明治大学）
- 3位 若杉 厚志（山形大学）

2nd class

- 1位 村山 祐見（弘前大学）
- 2位 川名 正人（日本大学）
- 3位 首藤 祐樹（山形大学）

[報告：山本寛都]

全日本ハンググライダー学生選手権 in足尾

8月29日～9月1日の4日間、全日本ハンググライダー学生選手権が足尾で開催されました。全国から40人ほどの学生ハングフライヤーが集合。初参加の東北大、九州大、九州工業大も加わり、大変賑やかな大会になりました。

開催前は台風10号がUターン、開催時期に最接近する予報で、初日、2日目はやむなく競技中止。選手の皆様には3日目に改めて集まっていただき、残る2日間に望みをかけました。

いざ集まってもらった3日目は強風で競技中止を決定。来年度は天候によっては板敷山の使用もできるような柔軟な運営が望まれると感じました。

4日目は風がそれほど強くなく、2ndクラスはデュレーション、1stクラスはサーキットとデュレーション、

Expertクラスはターンポイントレースにて競技を行うことができました。

Expertクラス

- 1位 菊池 裕貴（鳥取大学）
- 2位 深沢 拓人（東京大学）
- 3位 遠近 崇裕（東京大学）

1stクラス

- 1位 高木 方勝（九州工業大学）
- 2位 池田 豊和（九州大学）
- 3位 田中このみ（立教大学）

2ndクラス

- 1位 鳥居 仰（立命館大学）
- 2位 中島 翼（九州大学）
- 3位 小泉 彩奈（立教大学）

結果を見ると、九州勢が良い成績を残していることが分かります。今後の活躍に期待ですね！

天候に恵まれず一日のみの競技となり、スタ沈、山沈をしてしまう選手も出てしまい、全員が無傷で競技を終えることは残念ながらできませんでした。しかし、全国からのフライヤーが足尾で競技できたのは本当に幸せなことです。選手の皆さん、スクールや協賛いただいた企業の方々、スタッフ、大会成立のために尽力してくださったすべてのの方々に感謝を申し上げます。そして、ぜひ来年もこの全日本ハンググライダー学生選手権をよろしく願います。私たちも来年度の安全かつ円滑な大会運営に向けて力を注いでいきたいと思っています。

[報告：石田 渉]



茨城県足尾エリアに学生ハングフライヤーが集合。



1日のみの競技だったが選手は貴重な時間を共有できた。

JHFからのお知らせ

■補助動力副読本を頒布しています

「JHFパラグライディング教本副読本[動力付きパラグライダー(補助動力技能証/MPG技能証課程)]」を頒布中。

動力を使用したパラグライディングの練習のポイントと最低限の基礎知識を載せており、パラグライディング教本とともに繰り返し読んで、安全で楽しいフライト活動の助けにしてください。初心者の方はもちろん、すでに技能証をお持ちの方も、ぜひお読みください。

価格・申込方法:

頒布価格1,000円(送料別)。JHF登録スクールまたはJHF事務局にご注文ください。注文書はJHFウェブサイト「書籍情報」からダウンロードできます。

■PG教本基礎技術DVDを頒布中です

基礎技術DVD「JHFパラグライディング教本基礎技術」、続いて第2弾「テイクオフとランディング」を頒布しています。

「JHFパラグライディング教本基礎技術」には、JHF教本のA・B級からクロスカントリーまで各課程を修了するために求められる基本的なフライト技術について、ベテラン教員による模範演技を収録しています。実際の飛行での操作を、複数の方向から近接撮影し

たものが2画面で表示され、各操作での動きをはっきりと見ることができ、判りやすく表現されています。

第2弾は、フライトの基本中の基本であるテイクオフとランディングを収録しており、フロントライズアップの基本から場周アプローチによるランディングまで、各操作のポイントをつかみやすい内容です。

価格・申込方法:

頒布価格それぞれ1枚1,500円(送料込)で、お申し込み10枚毎に2枚追加してお送りします。入手ご希望の方は、最寄りのスクールでご購入いただくか、JHFウェブサイトにて注文書をダウンロードのうえお手続きください。

■JHF備品を貸し出しています

JHFでは備品の貸し出しをしています。ご希望の方は「JHFウェブサイト」→「JHFのご案内」→「無線機その他備品貸出」より貸出依頼書をダウンロードし、必要事項を記入・入力して、FAXかメールでお申し込みください。

■住所を変更したらお知らせください

住所を変更された方は、お手数ですが、下記項目をメール、FAX、郵便などでJHF事務局にご連絡ください。

フライヤー会員No./お名前/変更後のご住所/連絡先電話番号/メールアドレス

上空利用可能デジタル無線機使用のお勧め

平成34年にアナログ式簡易無線機の運用が終了することに備えて、JHFではハンググライダーやパラグライダーのフライト中に使用する無線機として「簡易無線登録局」対応のデジタル無線機の使用を推奨しています。

上空利用5チャンネルを搭載、デジタル方式の音声なので、混信もすくなくクリアで聞き取りやすくなっています。これまでSTANDARD製のVX-291SとVXD450Sの2機種のみでしたが、最近、軽量小型のICOM製IC-DPR30が加まりました。選択の幅が広がりましたので、この機に無線機の買替えを検討されてはいかがでしょうか。JHF賛助会員(JHF

ウェブサイト)にバナーを掲載)からも購入することができます。

なお、JHFではSTANDARD製デジタル無線機を14台保有し、登録会員に貸し出しをしています。ご希望の方は上記の「JHF備品を貸し出しています」に沿ってお申し込みください。

すでにデジタル無線機をお持ちの方は、無線機の登録手続きを済ませ利用料を納めているか、ご確認ください。登録をしないまま無線機を運用すると、不法無線局として処罰の対象になります(1年以下の懲役または100万円以下の罰金)。うっかり忘れていたということのないようお願いいたします。

久米島フライトは許可が必要に

久米島の航空自衛隊基地に新しいレーダーが設置されたことで、パラグライダー、モーターパラグライダーで久米島で飛ぶときには事前に那覇航空局に申請し国交省から許可を得ることが必要となりました。ビジターが久米島で飛ぶ場合は事前に申請し許可を得ないと航空法違反となります。フライトの前には、那覇空港情報管制管(TEL:098-859-5132)に確認してください。ご不明な場合は下記へご連絡ください。

ブルーフィールド久米島

TEL:090-5922-5283

E-mail:

info@bluefield-kumejima.com

■お問い合わせはJHF事務局へ

公益社団法人日本ハング・パラグライディング連盟

〒114-0015 東京都北区中里1-1-1-301

TEL.03-5834-2889 FAX.03-5834-2089

E-mail: info@jhf.hangpara.or.jp

http://jhf.hangpara.or.jp/

*このJHFレポートには補助動力委員会からのアンケート、賛助会員からのお知らせを同封しています。また、神奈川県在住の方には、県連盟からのお知らせも同封しています。

被災地復興 応援プロジェクト 「空はひとつ」

東日本大震災被災地への義援金を引き続き募っています。なお、7月20日～8月末日に寄せられた義援金は熊本地震被災地向けとし、45,000円を熊本県フライヤー連盟に託しました。

◇義援金振込先

三菱東京UFJ銀行(銀行コード0005)

巣鴨支店(店番号770)

口座番号 普通 0017991

口座名義 公益社団法人日本ハング・パラグライディング連盟

JHFレポート215号

発行日:2016年(平成28年)10月20日

発行:公益社団法人 日本ハング・パラグライディング連盟(JHF)

編集:JHF事務局

印刷:株式会社サンライズ